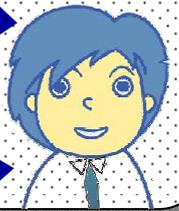




ねっどわーく



H24. 04. 04

No.2

■縦糸と横糸の原則

自分のことは棚に上げて（笑）、子どもたちとどのように関係づくりをしていくかについて。

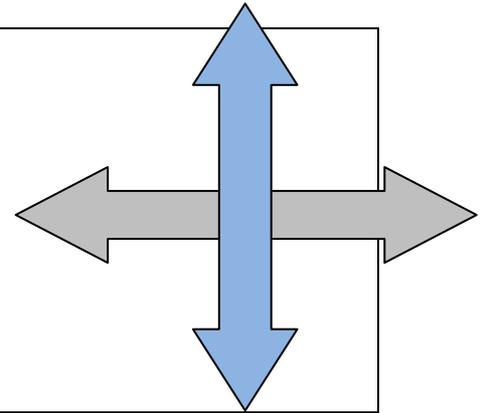
「縦糸を張る」「横糸を張る」という考え方。

縦糸とは…教師（教える存在）と子ども（学ぶ存在）との関係づくり

返事、挨拶、言葉づかい、学級内ルールなどの規律を確立して、教師と子どもとの縦のつながりを生み出すこと。

横糸とは…教師と子どもとの心の通じ合い、

一緒に遊ぶ。良い点を伝え、ほめ、励ます。笑い合い、伸びやかな雰囲気を作り出す。子ども同士で教え合い、助け合い、学び合う。など



この2つがしっかりと張れて、子どもたちとうまく関係づくりができる。また、安定した学級経営ができる。

教師が、最初から子どもたちにいい顔をしてしまって、やさしさばかりを前面にだしてしまうことがよくある。いわゆる迎合してしまうということ。「横糸」ばかりで子どもと関わろうとする。

最初は、子どもたちが歓迎してくれる。しかし、そのうちに、子どもたちは勝手に振る舞い、どんどん関係が壊れていって、最後にクラスは崩壊状態になる。ちょうど6月頃が多い。

また、「縦糸」ばかりで厳しさを前面にだして、子どもと関わろうとするのもよくない。これも子どもたちから反発を買って、関係が壊れていくし、外圧（押さえつけること）でよしんばその場をのりきっても、教師が怖いから言うことをきいているだけであって、子どもが心を開いた状態には絶対ならない。

大切なのは、縦糸（厳しさ）と横糸（やさしさ、おもしろさ、楽しさ）の2つ。この2つがあるからこそ、子供たちから信頼される教師になれるのだ。

しかし、実際に「縦糸・横糸」を張ろうとすると、戸惑うはずである。矛盾する2つのことを同時に行わなくてはならないからである。「どこまで子どもを許せるか」の境界線。

「縦糸を張る」とときには、子供たちときちんと**距離**をとらなければいけない。よい大人の見本の存在として。

「横糸を張る」とときには、子供たちにぐっと**距離**を近づけなければいけない。まるごと受け止めてくれる安心感を。

この、バランス感覚。子どもたちが好きな先生は、「ふだんはやさしくて、ニコニコしてて、勉強が楽しいけど、悪いことをしたときには厳しく叱ってくれる先生」だ。やさしいばかりでは×、厳しいばかりでも×。

基本、良いことは良い、悪いことは悪い、という軸をぶらさないこと。留意すべき点として、悪い場合には、子どもの気持ちに寄り添いながら、なぜ悪いのかを、きちんと教えること。子どもに気づかせること。決して怒鳴るのではなく、かみくだいて…。（と言いつつ、よく怒鳴ってしまうことがよくあるので自戒自戒…）

「縦糸」と「横糸」が織りなすからこそ、良き学級風土（布）ができあがっていくのだ。

ちょうど、中島みゆきの歌「糸」♪のように。この歌、好きです。（*_^*）

<参考文献> 「必ずクラスがまとまる教師の成功術」

～学級を安定させる縦糸・横糸の関係づくり～（学陽書房 野中信行・横藤雅人著）